戯れ

酒井美意子

中央公論社

風の戯れ

©一九八四
検印廃止

定価一一〇〇円

昭和五十九年六月十日初版印刷
昭和五十九年六月二十日初版発行

著者　酒井美意子

発行者　嶋中鵬二

印刷所　三晃印刷

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替 東京二―三四

ISBN 4-12-001299-9

風の戯れ　目次

華族曼陀羅

幻想 7
華燭 15
温室のカトレア 21
輪舞 36
ギャラリーで 54
カデンツア 61
晩鐘 71

炙りだされた欲望

雨の夜の宴 91
陰謀 113

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

行雲流水 129
孤独の刃 137
残月 147
乱舞 159

窯変の華

回り舞台 179
勝負 188
青磁 199
来訪者 207
サロン・ダムール 219
春爛漫 229
復活 254

装幀　深井　国

風の戯(たわむ)れ

華族曼陀羅

幻想

小坪から稲村ヶ崎の突端まで、まろやかな弧を描いて広がる鎌倉の海は、八月の日射しの下で輝いている。

防風林の丈の低い松林は、枝先を等しく陸に向けて海風に耐えているように見える。

熱にさらされた由比ヶ浜の砂丘には、処どころに浜ひるがおが蔓を伸ばし、花は暑さに萎えしぼむ。

土用波とクラゲが出始めた今、この海辺に人影はまばらである。海浜ホテルの前庭ではダックスフントをつれた金髪の少年が走りまわり、色あせたデッキチェアにもたれて中年男が本を読んでいるばかりだ。海を渡ってきた風の中で、浜辺には重いけだるさがよどむ。

紺碧の海は生きものの鼓動のように大らかなうねりを岸辺に送りつづけ、猛(たけ)だけしく盛り上がる水面は一瞬陽光にきらめく。

その時、松林の一角から、若い雌鹿が跳び立つように走り出した女が、灼けつく砂浜を爪先立って水に向かう。

桂子は蒼い水に体を沈めて、沖へ向かってのびやかに泳いでいった。海はあたたかく、目にしみる塩気が心地よい。両手を水中に伸ばして大きく掻くと、体の下に水流ができて軽がると進む。「これが娘時代最後の夏になる」と彼女は思う。昨日までここでいっしょに泳いでいた級友たちも今日は大かた東京に引きあげてしまった。桂子は一日だけ一人でいたかったのだ。

春には卒業、そして結婚。独身最後の夏休みを、せめて一人で過ごす日が欲しかった。

華やかな貴族社会でいつも注視の的だと自負している桂子がみせる素顔は、海の中にしかない。たとえ海の中でも、昨日までの彼女は友人に囲まれていた。N侯爵の令嬢、K伯爵の令息、S宮家の姫君とそのお付きの人たち。彼らといっしょに泳ぐとき、桂子は公爵令嬢としての自分を瞬時も忘れることはできないのである。

安土桃山時代以来、軍事面でも文化面でも他の大名たちの追随を許さなかった名門鳥羽家に生まれた彼女にとってそれは物心ついたときからの習慣であった。

悪びれず、ためらわず、てんたんと振舞いながら、心の奥底に漠然とした惧れを桂子は抱えている。そういう少女にありがちな不安をきれいにふるい落とし、大人への境界を早く越したいとねがっていた。娘時代への未練など、ひとかけらもありはしない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

彼女は沖へ向かってひたすら泳ぐ。未知の領域が無限に広がる。大人の世界はさぞ華やいだものに違いない。結婚すれば、今まで自分を縛っていたタブーはほどけてなくなる。これから入っていく世界、そこは地位やお金を存分に持った大人たちが、色好みの会話を交わしながらスリリングな恋を楽しみ、スキャンダラスなドラマに憂き身をやつす、すてきな世界であるらしい。

すでに碧色に変った海の上で、桂子は全身を浮かしていた。

何ととてつもない自由！

「アラッ、ずい分沖へ出てしまった。そろそろ引き返さなきゃ……」

彼女はクルッと足をちぢめると、頭を水中に押しこんでターンを切る。

遠い渚に、水着姿の男が二人、帽子もかぶらず立っているのが目に入る。

「小池と土屋。お付き武官も楽じゃないだろうに。泳いだらよさそうなものを」

と、あの炎熱の浜辺を想い出しながら、桂子は律義な従僕たちに同情する。

「この広大無辺の海に浮かぶ私って何だろう。私はもしかしたら、いや多分海から来たのだ。三好達治の詩にあったっけ。〝日本人の使う『海』という字にはその中に母がいる。フランス人の使う La mère という言葉には母の中に海がある〟だったかしら……。ほんとだ。私はこの原始の海から生まれ、またそこへ帰っていくのかもしれない。海は私にとってふるさとともいうべきもの。それに較べたら、シャンデリアのきらめく華族会館のパーティーなど、つまらない絵空事

に思えてくる。そこで語られる虚飾にみちた会話や戯れの恋は、ひどく貧弱な人工のものにすぎないのではないかしら。でも私は一生その中で生きていくのだ。あの社会の外に出るのはコワイ。あの囲いの中で私は一生を送る。面白く楽しまなくちゃ。自分の人生を演出し演技しつづけるのは案外愉快なことかもしれない。私は何事にも誰にも、支配されることはないだろう。私は決して何ものにも溺れることはないだろう」

岸は目前に迫っていた。桂子は誰に気を遣うこともなく、たっぷりと一人の時間を持てた満足感にひたりながらも、ちょっと長すぎた遊泳に体がすっかり疲れているのを感じた。手足の動きが鈍くなっていた。

「もうそろそろ足がつくころだな」

と体を立ててみれば、足下には底しれぬ深淵がひそんでいる。恐怖で心が凍った。

そのとき沖からしのびやかに追ってきていた巨大なうねりが、だしぬけに彼女を持ち上げたかと思う間もなく一斉にくずれかかってきた。

桂子は無我夢中で体を立て直そうとするが乱れとぶ飛沫の中に吸いこまれ、荒あらしい水の束に前後左右から翻弄され水底に引きずりこまれる。さんざんに小づきまわされ、何も聞こえず、見えず、息もできない。

次の瞬間、まるで悪魔のマントに引きさらわれるように沖へ——

「もうダメだ」

と彼女は薄れかける意識の底で感じた。

とめどなく引きずられる強引な力からフワッと解放されると、そこに空気があった。やっと呼吸ができた。と、あたたかい人の手が触れた。アア、これは夢かも――

背中を支えられていた。桂子はまだぼんやりしながら、ふと間近な所に人の顔を見た。若い男だった。

「よかった。気がついた？　ボクの言うことわかる？」

桂子はコックリうなずく。

「ヨシ、体の力を抜いて。このまま押して行くから、頭は水につけて、上向いて寝てなさい」

水面に桂子を寝かせたまま、男は背中を支えて泳ぎ出す。

ちょうど右肩の横に濡れた男の顔が浮き沈みして、うねりのくるたびに男は彼女をしっかりと確保し、高く捧げる。

その彫りの深い精悍な容貌は、桂子の無防備な意識の中に一気に侵入する。

見つめられていることに気づいた男は、ちょっとはにかんだように桂子を見てほほえんだ。

「どうも……ありがとう……ございます」

「どういたしまして。サア、そろそろ足がつくでしょう」

言われて彼女は仰向けの体を起こそうとした。が、そのままクタクタと水に沈みこんでしまう。

その倒れこむ体を素早く支えながら、
「無理しないで。ゆっくり」
そして桂子を両手に捧げ胸高に抱くと、男は用心深く歩きはじめた。
桂子は男の負担を軽くするために、右手を男の首にかける。二人は見つめあった。
「一人で泳いでいたの？」
「エエ」
「家は近いの」
「山の方」
「危なかったよ」
「私、死ぬかと思った」
「体がすっかり冷えている。熱い砂丘でしばらく寝てた方がいい」
「もう大丈夫よ」
「ボクの言う通りにするんだよ。砂で体を温めたら、家へ帰ってお風呂に入ってシンから温まらなきゃ。わかった？」
「ハイ、そうします」
桂子は自分でも驚くほど甘い可愛い声で答える。
岸辺が近づき、男の腰のあたりまで水が減ってきていた。

渚で右往左往していた小池と土屋は男に抱かれた令嬢を見つけて仰天し大騒ぎとなった。二人は血相変えて突進してくると、

「いかが遊ばしましたか」

「私どもがおりながら、何としたことで」

と口々に言いわけめいたことを口走りまくしたてるが、男は彼らを無視するとそのまま砂浜に上がる。

やたらに駈けまわる二人の男を従えて、浜ひるがおの花のしとねに桂子をそっと横たえると、彼は下僕に言った。

「溺れかけていたんです。土用波にさらわれて。水は大して飲んでいないでしょう。体を充分あたためて下さい。ショックで疲れてますから、気をつけてあげて下さい」

「それはそれは、まことにどうもはや、恐れ入りましてございます。ありがたいことでございます」

土下座してのべる謝辞には返事もせず、男は桂子の上にかがみこむと、その頬についた砂を人差指で払いながら、

「じゃあ、気をつけて」

そして胸に置いた彼女の右手に手を重ね、

「海をナメちゃいけないよ」

と言い捨てそのまま立ち上がると、水辺に向かって何ごともなかったように歩き出す。長身の後姿は逆光の中で、ギリシャ彫刻の神のように桂子の眼にやきついた。

下僕が二人、男の周囲を小走りにしてわが女主人を助けてくれた人の名を聞くべく奮闘するが、男は事もなげに片手をあげて遮ると、そのまま海の中へ消えた。

「あれは果たして、現実の人だったのだろうか？　それとも海の神の贈りもの……」

桂子は、しびれるような四肢の疲れの中で反転しながらあの男のたくましい腕、頬の砂を拭ってくれたやさしさ、ぶっきら棒な態度、掌のあたたかさをくり返し反芻すれば、目は冴え返るばかりである。

上流社会の少女たちの、性の目覚めは早い。桂子とても例外ではなかった。それはどこの国でもそうだが、有閑階級にとって色ごとは日常茶飯のことである。男女関係に敏感になるのも当然であった。恋人を気取る青年は桂子の周囲に溢れ、幼稚園のころから胸ときめかした男はいた。だが、彼女の胸の奥にこれほど鋭い痛みを残したまま、いずこともなく立ち去った男はかつてない。それは目のくらみそうなショックであった。

風が出たのだろうか。庭の松林がごうごうと鳴り渡り、遠い潮騒が高まる。桂子は全身を熱くしながら過去の時間の中をさまよう。

「あの人は誰？　どこの何者？　あの腕の中にもう一度抱きすくめられることなら……あの腕の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.